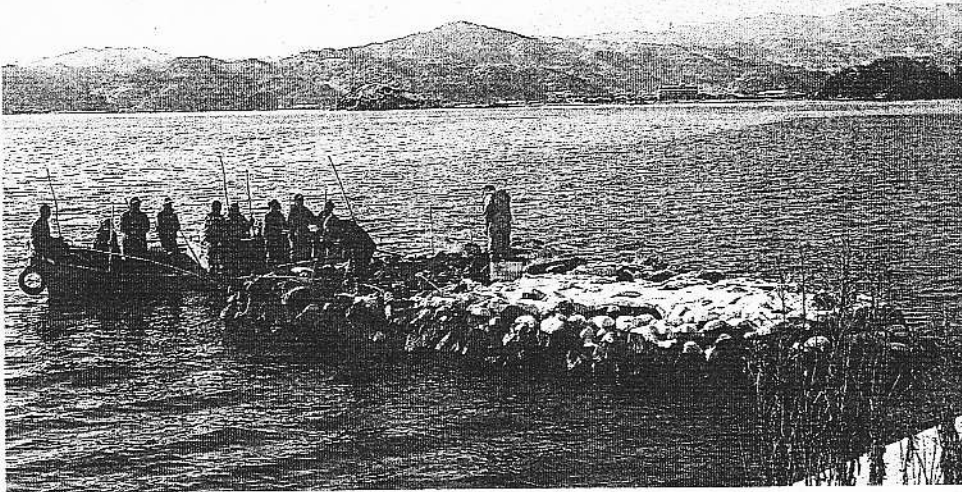


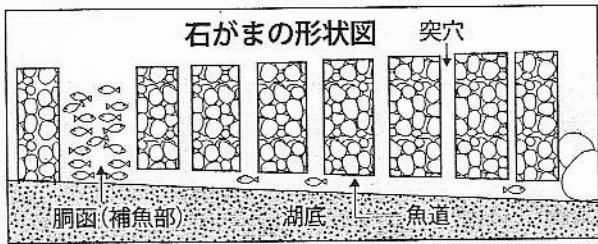
「石がま漁」操業できず



今年は見ることができない「石がま漁」の様子。沖側から数時間かけ、浜側の胴函に魚を追い込んでいく＝県教委提供

県の無形民俗文化財に指定されている湖山池（鳥取市）の伝統漁法「石がま漁」が今冬、使用する魚礁に水草「ヒシ」の実が詰まるなどし、操業できていない。昨年からは県と鳥取市が汽水湖化を目指し、塩分濃度を引き上げた影響で、発芽せず湖底に残ったヒシの実が大量に流れ込んだのが原因と見られるという。両自治体の担当課が共同で対応策の検討を始めたものの、「汽水湖化による環境改善」と「文化財保護」の板挟みに頭を悩ませている。

【田中将隆】



県と市は昨年3月、池と日本海を分断していた水門の開放頻度を多くすることで、塩分濃度の調整を開始。これまで、大量発生で汚臭問題などを引き起こしていたヒシの繁茂を抑制するなど想定通りの効果を見せてきた。一方で、発芽せず湖底に残ったヒシの実が、石がま漁用に石を積み上げた魚礁に入り、漁を不可能にしたのは「想定外」（市

湖山池の汽水化計画で 県無形文化財 魚礁にヒシの実詰まる

鳥取市

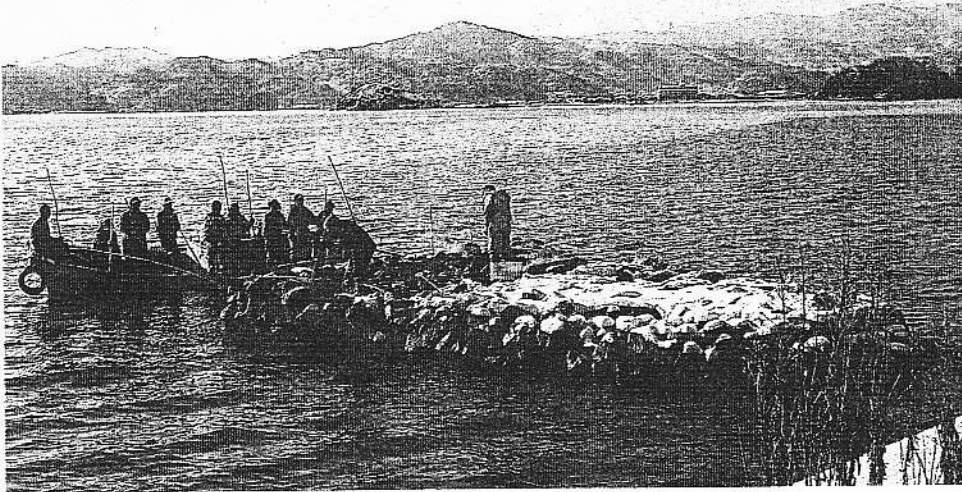
の担当者)の事態だった。石と石の隙間などに越冬する魚が潜む習性を利用して漁だが、肝心の隙間や魚道などがヒシの実で埋まってしまい、魚がほとんど魚礁にいないという。魚礁には、淡水には生息しないフシツボが付着しているのも確認されており、漁師が魚礁の上に立った際、鋭くどがったフシツボの殻だけがする危険性も指摘されている。

汽水湖化は、県と市が昨年1月に策定し、2030年後の池の姿を示した「湖山池将来ビジョン」で決められた長期計画。「海水の10分の1から4分の1程度」と塩分濃度の目標値も示されている。市の担当者も「現在詰まっているヒシの実を、取り出せたとしても、塩分濃度を下げるわけにはいかず、漁ができなくなるかはその状態に回復するかの透明。今後、どんな対策を取ることができると長期戦の構えも見せている。」

県教委文化財課の担当者は「道路工事との兼ね合いで埋蔵物などの有形文化財の保護が難しくなることは多いが、自治体の施策で民俗文化財の保護に影響を与えない」と話している。

石がま漁 「石がま」と呼ばれる人工の魚礁を使って行う伝統漁法。全国で鳥取市の湖山池だけで見られない。厳寒期に越冬しようとする魚が岩場などに住み着く性質を利用。数千個の石を積み上げて造った魚礁の中に潜むフナなどの魚を、石がま上部の「突穴」から松の棒で突くことで「胴函(どうかん)」と呼ばれる木箱に追い込み、最終的に網ですくい上げる。魚礁は、全長約10m、幅は沖合に面した部分に7.5mあるが、浜に近い胴函に近づくと細くなり、2層程度になる。1700年前後には使用されていたと言われ、明治期には86基の操業が確認されているが、現在は4基に激減している。漁期は1月下旬から約1カ月。2005年に県無形民俗文化財に指定された。

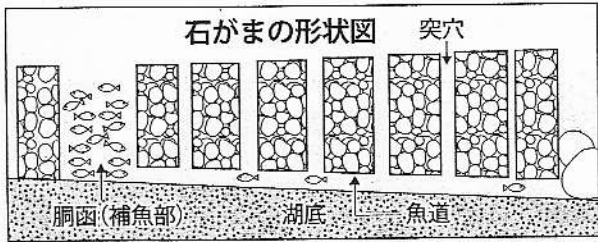
「石がま漁」操業できず



今年は見ることができない「石がま漁」の様子。沖側から数時間かけ、浜側の胴函に魚を追い込んでいく＝県教委提供

県の無形民俗文化財に指定されている湖山池（鳥取市）の伝統漁法「石がま漁」が今冬、使用する魚礁に水草「ヒシ」の実が詰まるなどし、操業できていない。昨年からは県と鳥取市が汽水湖化を目指し、塩分濃度を引き上げた影響で、発芽せず湖底に残ったヒシの実が大量に流れ込んだのが原因と見られるという。両自治体の担当課が共同で対応策の検討を始めたものの、「汽水湖化による環境改善」と「文化財保護」の板挟みに頭を悩ませている。

【田中将隆】



県と市は昨年3月、池と日本海を分断していた水門の開放頻度を多くすることで、塩分濃度の調整を開始。これまで、大量発生で汚臭問題などを引き起こしていたヒシの繁茂を抑制するなど想定通りの効果を見せてきた。一方で、発芽せず湖底に残ったヒシの実が、石がま漁用に石を積み上げた魚礁に入り、漁を不可能にしたのは「想定外」（市

湖山池の汽水化計画で

魚礁にヒシの実詰まる

鳥取市

の担当者)の事態だった。石と石の隙間などに越冬する魚が潜む習性を利用して漁だが、肝心の隙間や魚道などがヒシの実で埋まってしまい、魚がほとんど魚礁にいないという。魚礁には、淡水には生息しないフシツボが付着しているのも確認されており、漁師が魚礁の上に立った際、鋭くどがったフシツボの殻だけがする危険性も指摘されている。

汽水湖化は、県と市が昨年1月に策定し、2030年後の池の姿を示した「湖山池将来ビジョン」で決められた長期計画。「海水の10分の1から4分の1程度」と塩分濃度の目標値も示されている。市の担当者も「現在詰まっているヒシの実を、取り出せたとしても、塩分濃度を下げるわけにはいかず、漁ができなくなるか、回復に要する期間は、来年以降の漁の透明。今後、どんな対策を取ることができると長期戦の構えも見せている。」

県教委文化財課の担当者は「道路工事との兼ね合いで埋蔵物などが1月、市に漁がでる有形文化財の保護が難しいことは多いが、自治体の施策で民間企業が現地で確認し、対策協議に入った。今月中にも再度、実務者たちが話し合っている。」

石がま漁 「石がま」と呼ばれる人工の魚礁を使って行う伝統漁法。全国で鳥取市の湖山池だけで見られない。厳寒期に越冬しようとする魚が岩場などに住み着く性質を利用。数千個の石を積み上げて造った魚礁の中に潜むフナなどの魚を、石がま上部の「突穴」から松の棒で突くことで「胴函(どうかん)」と呼ばれる木箱に追い込み、最終的に網ですくい上げる。魚礁は、全長約10m、幅は沖合に面した部分は7.5mあるが、浜に近い胴函に近づくと細くなり、2層程度になる。1700年前後には使われていたと言われ、明治期には86基の操業が確認されているが、現在は4基に激減している。漁期は1月下旬から約1カ月。2005年に県無形民俗文化財に指定された。